地雷、子ども兵問題などに取り組む

NGO創設者

私たちは微力だけど無力じゃない。人には未来を変える力がある

テラ・ルネッサンス創設者・理事
鬼丸昌也氏

おにまる・まさや●1979年生まれ。大分県立日田高校、立命館大学法学部卒。カンボジアの地雷撤去支援活動に参加したことをきっかけに在学中の01年10月テラ・ルネッサンスを設立。以降、途上国支援に取り組んでいる。

現在の活動について教えてください

テラ・ルネッサンスは「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」を目指して、5つの活動を行っています。その中のひとつ「地雷撤去」は私がテラ・ルネッサンスを設立するきっかけとなったものでメインの取り組みのひとつです。地雷は安く大量生産でき、相手を選ばず、戦争後も人々を殺傷する「悪魔の兵器」と呼ばれています。特に被害が大きいのがカンボジア。毎年多くの市民が片足をなくすなどの地雷の被害にあい、危険なので農地開発ができない状態にあります。そのため、テラ・ルネッサンス設立当初から地雷と不発弾による犠牲者ゼロと汚染影響ゼロ、そして貧困地域の開発支援へとつなげることを目標として地雷撤去の支援を継続しています。地雷撤去作業は高度な知識と技術が必要な命がけの作業なので、われわれが実際に行うのは難しい。だから地雷撤去活動資金や撤去器具の提供、地雷撤去後の村落開発支援などを行っています。

主な支援先は地雷や不発弾などの戦争残存物を撤去するイギリスのNGO「MAG」。MAGは、ひとつでも多くの地雷を撤去することはもちろん、撤去後も村人たちの生活が安心・安全なものになっているのかを重視しています。われわれはそんなMAGの活動に協力するとともに、撤去後の村での開発支援も行っているんです。

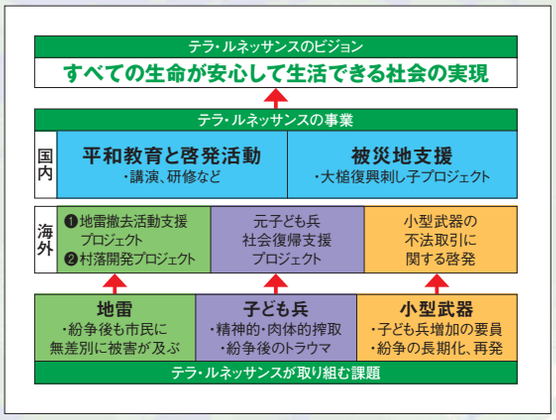
もうひとつのメインとなる活動は、「元子ども兵の社会復帰支援」。子ども兵とは、正規、非正規を問わず、あらゆる軍隊に所属する18歳未満の子どものこと。少年だけでなく、少女も含まれています。アジア、アフリカ、中東、中南米などの紛争地域で現在も武器を手に戦わされており、世界で少なくとも25万人以上いるといわれています。普通の子どもが兵士になるのは主に2つのパターンがあり、ひとつは、貧困にあえぐ子どもたちが衣食住を期待して自分から志願して兵士になる場合。もうひとつは、誘拐されて、強制的に兵士にさせられる場合。子どもは純粋で洗脳しやすいので、内戦状態にある国の軍隊が町や村を襲って子どもを誘拐します。さらわれてきた子どもは、まず親や友人など身近な人を殺させられたり、腕や足を切り落とさせられたりして、他人を殺すことへの抵抗がなくなります。一人前の兵士として育て上げられるにはそう時間はかかりません。当然ですが、兵士になると人殺しを繰り返す毎日となり、子どもらしく安心して遊び、学ぶことは不可能となります。そして人を殺したり傷つけたりすることで自分の心も深刻な傷を負います。また、軍隊から抜けた後も、村人から差別されいじめを受けます。仕事をしたくても教育を受けていないので最低限の読み書きもできず、軍隊という特殊な環境下にいたせいで人とうまくコミュニケーションができないといったハンデを負います。

そこでわれわれはウガンダで、元子ども兵社会復帰センターを設立し、元子ども兵に対して、毎月の食費と医療費の支援、識字・計算能力などの基礎能力向上訓練や洋裁、手工芸などの職業訓練、心の傷をいやすためのカウンセリング、平和教育などを行っています。活動の目標は元子ども兵の経済的自立、現地コミュニティへの復帰、紛争の再発防止です。

3つめの活動が「不法小型武器取引の規制」。ひとり、もしくは数人で運搬・使用が可能で子どもでも大量殺戮が可能な小型武器の不法取引規制キャンペーンを行っています。4つめが「平和教育」。ひとりでも多くの人に、紛争や戦争によって悲惨な目にあっている人々がいることを伝え、気づきを促し行動を起こしていただくために、これまで私が見てきたこと、経験してわかったことを全国を回って講演しています。5つめが「被災地支援」。昨年の3月11日の東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県大槌町の人々の自立を支援するため「大槌復興

「国際協力」を仕事にする

■ 特定非営利活動法人テラ・ルネッサンスの活動内容



テラ・ルネッサンスは「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」を目指し、地雷・クラスター爆弾、子ども兵、小型武器に関する課題に取り組んでいる

刺し子プロジェクト」などの活動を行っています。

その中で鬼丸さんはどんな立場でどんな活動をしているのですか？

2011年3月に理事長を退任し、現在は理事として働いています。その中で、平和教育のための講演と被災地支援、そして団体の資金調達を主に担当しています。なかでもメインとなる講演は全国の小学校から大学までの教育機関、企業、自治体などで年に120回ほど行っています。

どうしてテラ・ルネッサンスを立ち上げたのですか？

そもそものきっかけは、高校3年生のときに国際協力のスタディツアーでスリランカに行ったこと。それまでも国際問題に関心があり、勉強はしていましたが、初めての現場で実際にこの目で現状を見て、においを嗅いで、いろんな人から話を聞くことで、リアリティが格段に増したんです。最終日にスリランカの社会活動家・アリヤラトネ博士が私たちに語りかけてくれた「すべての人に未来を作る力がある」という言葉で、そうなんだ、信じれば未来は変えられるんだと思ったんです。

そしてもっと現場を見てみたいと大学4年生のときに、とあるNGO主催のカンボジアの地雷撤去支援に参加しました。「同じ人間なのになぜこんなひどいことができるのだろう」と思うのと同時に「自分には何もできない」と無力感に襲われました。しかしそのとき地雷で左手足を吹き飛ばされた義足のランナーに言われた「自分のできる限りのことをすればいい」という言葉が心に浮かんだんです。アリヤラトネ博士のあの言葉を思い出して、未来を変えるために自分にできることってなんだろうと考え抜いた結果、「この現状を人に伝えることならできる」と思いました。そして帰国後すぐにカンボジアでの現状を報告する講演活動を開始したんです。

これまで経済的に困ったことはないのですか？

団体を立ち上げて今年で12年目ですが、幸いなことに一度もありません。私自身の講演数も順調に伸び、団体としての活動領域も拡大してきました。もちろん高収入というわけにはいきませんが、職員に給料を払い、私自身も人並みの生活を送れるレベルの収入は得られています。寄付や会費で支援してくださる人々に深く感謝しています。

国際協力を仕事にして、今も続いている最大の理由は？

私たちは世界平和の実現を目指しているわけですが、平和にこだわる理由は、自分が安心して暮らしたいから。小さい子どもが泣いたりするのを見たり、理不尽な理由で人が虐げられ、殺されているのを見るのが嫌なんですよ。だからその原因を究明、解決して世の中を変えたいんです。

この仕事の魅力・やりがいはどんなところにありますか？

これまでの活動の中でかかわった人たちの変化を実感できることが大きなやりがいです。例えばもう10年以上講演をしているのですが、中学生のときに私の講演を聞いたことがきっかけでJICA（国際協力機構）に就職したり、私の本を読んだことで今大学で国際協力を学んでいるという人が結構いらっしゃいます。主体的に変化できた人たちとのそんな出会いによって、私自身学ぶことが多いですし、今後の活動に希望ももてています。

高校生にメッセージをお願いします

私は講演で「われわれは微力だが、無力ではない」とお伝えしています。例えば、コンゴの紛争は、携帯電話やPCに使われる資源の奪い合いも大きな原因となっていて、それにコンゴの子どもたちが巻き込まれている。つまりわれわれの生活がコンゴの子ども兵の問題につながっているんです。そういうことを知れば自分の問題だと受け止めることができ、自分が変われば世界が変わると思うこともできるのではないでしょうか。もちろん簡単なことではないですが、今始めなければ永遠に未来は変わらない、私はそう考えているんです。

イギリスのNGO団体MAGによるカンボジアでの地雷撤去（テラ・ルネッサンスは資金協力を行っている）

子ども兵の調査でウガンダの村を訪れた鬼丸氏（写真左）と現理事長の小川真吾氏（中央）

途上国行政官の能力開発に携わる

世界銀行職員

途上国の未来を担う行政官を対象に奨学金を提供し、研修を実施

世界銀行とはどんな組織なのですか？

先進国から出資金を集めて、経済発展を目指す途上国に貸し付ける国際機関です。単に融資をするだけではなく、その国が発展するためには、道路、教育、環境などの諸分野のうち、どこに力を入れるべきかを政府とともに考え、そのための技術的な援助やそれを支える人材の能力開発なども行っています。

世界銀行に入るまでの経緯は？

世界銀行を目指すようになったのは大学3年のとき。担当教授から、「お金があるところで物事は動く。世界銀行のような国際開発金融機関は予算規模も大きく、だからこそやりたいことができる」という話を聞いて影響を受けました。

とにかく修士号が必要だと考えて、アメリカに留学。国際金融と開発を学び、修了後、現地で世界銀行への就職活動を始めました。ただ、世界銀行では即戦力の人材が求められるので、実務経験がない私は苦労しましたね。最終的にはインターンシップで職場に入り、期間が終了する直前に、自分の能力やインターンシップ中に出した成果を自ら上司に売り込み、短期コンサルタントとして採用されました。

ワシントンDCで開催した研修にて。研修の場では、途上国間の知識共有を目的とした研修生同士の交流促進も図られる

現在の仕事内容について教えてください

世界銀行では、途上国の行政官を対象とした、日本政府100％出資の奨学金を出していて、彼らを対象とした研修も実施しています。その研修のプログラム開発や企画・運営が私の仕事です。さらに、出資者への資金の使途や事業の効果に関する説明や、留学先となる大学とのパートナーシップ構築なども行います。

研修は途上国・先進国の各地で開催するほか、オンラインでも実施しています。毎回、参加メンバーの専門分野や国籍などのバックグラウンドなどを調べて研修のテーマを決め、世界銀行内でテーマに則した専門家に依頼し、彼らと一緒にプログラムの内容を企画します。

この仕事の大変な点とやりがいは何ですか？

多くの国が出資している機関で、各国それぞれの思惑もありますから、意見をまとめるのはいつも苦労しますね。

また、研修などの取り組みは、成果が数字などに表しにくいのも悩ましいところです。しかし、実際貧しい暮らしからこの奨学金プログラムを経て政府高官になった人もたくさんいて、そういった方々や研修生と直接話をするときが、自分の中で迷いが消える瞬間です。

世界銀行を目指す高校生にメッセージを

いろいろな国から人が集まっているので、多様な価値観、意見が飛び交う自由さがこの職場の魅力ですね。また、家庭や個人の事情にも配慮してくれるので女性には特に働きやすいです。私自身、結婚を機に昨年8月ワシントンDCの本部から東京事務所に移りましたが、基本的に仕事の内容は変わっていません。

世界銀行で働くために必要なのは、一つは理屈じゃない情熱。もう一つは専門性ですね。例えば、土木、環境、高等教育といった開発に関連する分野について修士レベル以上の知識があること。本に書いてあることだけではなく、自分で見たり聞いたりした経験も大切です。

世界銀行 世界銀行研究所 プログラムアナリスト
春木由美氏

はるき・ゆみ●1977年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。米国ジョージタウン大学で外交学修士を取得後、2003年夏に世界銀行入行。米国ワシントンDCで8年勤務した後、昨年8月東京事務所に赴任。

「国際協力」を仕事にする

パレスチナなどで子どもの権利を守る

ユニセフ職員

紛争後の地域で困難な状況にある子どもたちを政策面からサポート

国際連合児童基金（ユニセフ）
パレスチナ ガザ事務所 子どもの保護担当官
根本巳欧氏

ねもと・みおう●1975年生まれ。神奈川・私立栄光学園高校、東京大学法学部卒業。米国シラキュース大学・マックスウェル・スクール大学院で公共行政管理学、国際関係論の修士号取得。民間企業、日本ユニセフ協会を経て現職。

この仕事を目指したきっかけは？

子どものころ、北京のインターナショナルスクールで出会ったユーゴスラビア（当時）の友達が国へ帰ったあと、ユーゴが崩壊したんです。当時「彼はその後どうなったんだろう」と考えたのが、「国家と人」を意識するようになったきっかけですね。14歳のころにベルリンの壁が崩壊し、そういう時代背景もあって、中学・高校時代には国際法に関心を深め、大学時代には、外務省のODA（政府開発援助）担当の部署でインターンをするなかで、国際人道援助や国際開発援助にかかわりたいという気持ちが強くなりました。

現在の仕事に就くまでの経緯は？

アメリカの大学院で行政管理学と国際関係論を学び、民間企業を経て、日本ユニセフ協会に転職しました。ただ、協会では広報の仕事が中心だったので、途上国支援のプロジェクト運営に携わるため、いろいろとアプローチをしました。その一つが、外務省のJPO派遣制度。この選抜に通って、自分が希望する国連機関・現地オフィスからの要望と合えば、国連職員として働くチャンスが得られます。私の場合も、同制度でユニセフ本体の職員となりシエラレオネに赴任。以後、同国で3年、モザンビークで3年働き、現在はパレスチナに移って3年目です。

仕事の内容について教えてください

職種は「子どもの保護担当官」です。紛争後の国や地域で困難な状況にある子どもたちを救うために、現地政府やNGO、各分野の専門家と連携して問題解決に取り組むのが役割。具体的には、親を失って路上で生活するストリートチルドレン、児童労働、18歳未満の早期結婚などの問題に取り組んでいます。

仕事の流れを説明すると、最初に現地をリサーチしてデータを収集し、それらをもとに、現地政府などと話し合って何が問題であるかを共有し、目標を決めます。それに基づいて計画を立て、実行に必要な人材を集め、法整備や政策立案のサポート、現場で子どもを保護するための体制づくりなどを行います。

私の場合、行政や法律の専門性を活かしたアドバイザーとしての役割もありますが、メインはこうしたプロジェクト全体の管理です。予算管理なども重要なので、一般的なビジネス感覚も大切です。

この仕事で特に意識していることは？

自分のものさしだけで判断しないことですね。例えば、シエラレオネで子どもの兵士の問題に取り組んだ際には、現地で元子どもの兵士が「親を失った自分たちに武装勢力だけが手をさしのべてくれた。兵士として一人前に扱ってもらえたのもうれしかった」と話すのを聞いて、先入観を覆されました。現地の事情を知り、相手の立場になって考えることで問題解決のアプローチの仕方は変わってきます。

この仕事のどんなところにやりがいを感じますか？

紛争後の社会には復興に向けた独特のエネルギーがあります。子どもたちも、「早く学校で勉強したい」と目を輝かせている。将来の国や社会を担っていくこうした子どもたちのために働くことには大きなやりがいを感じますね。

パレスチナ自治区・ガザのファミリー・センターにて。同施設では地元NGOが地域と協力し、子どもたちの心のケアに取り組む

途上国の国創りを支援する

JICA職員

新たに法律を作ったり、法制度の整備を行い、途上国の発展を支援

独立行政法人国際協力機構（JICA）
産業開発・公共政策部　ガバナンスグループ　法・司法課
金田雅之氏

かねだ・まさゆき●1977年生まれ。東京都立町田高校、一橋大学法学部卒。02年入構。国内事業部管理課、社会開発部、ニジェール事務所、シンガポール国立大学リーカンユー公共政策大学院留学を経て11年より現職。

国際協力の仕事に興味をもったきっかけは？

大学2年生のときの東南アジア旅行で、貧しい村の現状を目の当たりにしました。子どもたちが裸足でボロボロの服を着ていて…。ショックでした。自分はたまたま日本に生まれ、何不自由なく暮らす大学生。でも、自分がそこに生まれていたら全然違う人生になったんだな、と。途上国と先進国の格差の是正などに興味をもつようになり、それにかかわる仕事をしたいと思うようになりました。

JICAではこれまでどんな業務を経験してきましたか？

JICAは日本で唯一のODA（政府開発援助）実施機関です。職員には広い視点に立って国際協力に取り組むことが求められ、2年から4年に1回は人事異動があります。私もこれまでにいくつかの部署を経験しました。入ってすぐに配属されたのは国内事業部管理課で、途上国からの研修員受け入れ事業の制度設計などに携わりました。

その後、社会開発部（当時）でアフリカのケニアなどの人材育成、アンゴラの平和構築のプロジェクトに携わりました。07年から3年間は西アフリカのニジェールにある現地事務所へ赴任し、教育分野のプロジェクトに従事。砂漠地帯にJICAの支援で完成した小学校があり、生き生きと学ぶ子どもたちや、学校運営にかかわる教師や住民の姿が印象に残ります。JICAの活動が根を下ろしていることを実感し、うれしかったです。

現在はどんなプロジェクトにかかわっていますか？

シンガポール国立大学リーカンユー公共政策大学院での留学を経て、今は東京の本部に勤務。法律や法制度の整備、民主化を促進するプロジェクトを行う部署で働いています。担当国はカンボジア、ネパール、モンゴル。モンゴルで実施するのは、調停制度の導入です。社会主義から市場経済化されて商業活動が活発化し、商取引のトラブルの増加に伴い、当事者間で解決を目指す調停制度の普及が求められています。ネパールでは、ヒンズー教の倫理規定を土台にした法典が使われていましたが、現代社会に適応した新民法の作成を支援し、法律家の人材も育成しています。

カンボジアに対する支援は、国家の基盤整備にかかわる大きなプロジェクトです。カンボジアは30年以上続いた内戦で200万人以上の人命が失われ、法律や司法制度、法律家も壊滅状態でした。そんななか、1999年、JICAが支援を開始しました。法務省、最高裁判所、日本弁護士連盟、法律学者など多くの法曹関係者の協力を仰ぎながら、カンボジア民法と民事訴訟法の草案づくりや立法化を進めてきました。昨年12月に支援の集大成としての新民法が適用されましたが、新民法が根づくまでは今後も息の長い支援が必要だと思います。

金田さんはどのような仕事をしているのですか？

東京にいるときは、現地と連絡を取り合って、プロジェクトの進行の確認や、助言をするといった業務が多いです。また、プロジェクトがより効果的なものになるよう、日本国内の法曹関係者とも頻繁に協議を重ねています。

現地への出張も多く、プロジェクトに関する調査や、効果をあげているかの評価を実施します。今年5月のモンゴル出張では、多くの関係者に会いました。弁護士や裁判官、モンゴル政府の法務内務省の方、国会で審議するための法案を作成する大統領府の方、公的機関の方など。問題点や今後について議論しました。皆さん、とても前向きで、意気込みを感じました。そういう手応えがこの仕事の醍醐味です。途上国の制度全体や政策にアプローチできるという、大きなやりがいを感じます。

途上国の子どもたちと地域を支援する

国際NGO職員

貧困に苦しむ子どもたちとその地域のために日本からサポート

特定非営利活動法人　ワールド・ビジョン・ジャパン
支援事業部　スポンサーシップ事業課　プログラム・オフィサー
大江景氏

おおえ・あきら●1982年生まれ。神奈川県立生田高校、東京農業大学国際食料情報学部卒。青年海外協力隊、WFP(国連世界食糧計画)、JICA南部スーダンフィールド事務所（在外専門調整員）などを経て11年より現職。

担当地域のひとつ、ルワンダのキラルムジ地区で子どもたちと一緒に。（写真提供／ワールド・ビジョン・ジャパン）

ワールド・ビジョン・ジャパンの支援活動とは？

貧困や困難な状況に苦しむ子どもたちと家族、そして彼らが暮らす地域を支援するために活動するNGOです。昨年度は世界36カ国で142の事業を実施しました。NGOとしては規模が大きいと思います。

支援内容は大きくわけて2つ。1つめは緊急人道支援です。自然災害や紛争などの緊急時、食糧や毛布などを届けたり、復興に向けて援助をします。海外だけではなく、東日本大震災の被災地も支援しているんですよ。2つめは途上国への開発援助。国や地域が抱えている課題に合わせて教育、医療・保健衛生、農業指導、職業訓練、HIV／エイズなど幅広い分野で取り組んでいます。私が担当しているのも開発援助の事業です。

大江さんはどのような仕事をしているのですか？

私はアフリカと中南米の計5カ国の地域開発プログラムを担当し、現地事務所のスタッフと協力しながら進めています。計画や進め方を一緒に考えたり、問題点があれば話し合って軌道修正したり、予算の調整もします。プログラムが計画通りに進んでいるかを評価するのも私の仕事です。ふだんは東京の事務所から現地へ連絡を取っているのですが、年に5回くらいは現地へ行きます。

これまでの経歴を教えてください

私は高校時代から国際協力の仕事を志望し、農業系大学の国際農業開発学科で学びました。在学中には途上国へ出向き、国際機関やNGOなどでボランティアやインターンシップを経験。卒業して現職に就くまでも青年海外協力隊や政府機関などで働き、中南米やアフリカの途上国の現場で農業開発やプロジェクト支援などに従事してきました。こうした経験を積み重ねるなかで、英語とスペイン語を習得することもできました。

開発援助の活動の資金はどのようにしているのですか？

「チャイルド・スポンサーシップ」といって、私たちの活動に賛同してくださる方から毎月、支援金をいただくプログラムがあり、現在、日本では5万人を越える方々に参加していただいています。そうした方々に対して報告書を作成するのも私の重要な仕事です。また、日本政府の機関や国際機関などと連携して行う活動もあり、助成金で行う事業もあります。助成金を獲得するための企画書作成も担当しています。

この仕事のおもしろさややりがいは？

現地へ行き、地域の人たちとの出会いが楽しみです。いろいろな人がいて、いろいろな考え方や暮らし方に接すること自体、おもしろいと感じます。現地の子どもたちの笑顔と接するときもうれしいですよ。そういう子どもたちや地域住民のために支援をしていきたい。チャイルド・スポンサーシップによる支援は、10年から15年という長い期間をかけて行うものです。例えば、貧困地域に学校ができたとします。それも前進ですが、施設を作っただけでは支援は終わりではありません。学校で教える教員を養成するために、地域の住民が自主的に自治体に働きかけ、研修を開くようになったというような、地域全体が変わっていく様子を目の当たりにしたときは、よろこびを感じます。

フィリピンの貧困社会をビジネスで変える

社会起業家

スカイプ英会話で子どもの夢と自立を実現する

ワクワークイングリッシュ代表
山田貴子氏

やまだ・たかこ●1985年生まれ。神奈川県立湘南高校、慶應義塾大学環境情報学部卒、同大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2009年、大学院在学中に株式会社ワクワークイングリッシュを設立。

現在の仕事について教えてください

フィリピンと日本をインターネットで繋いで、オンライン英会話事業を展開しています。使用するのはパソコンとカメラとマイクで会話ができる「スカイプ」というシステム。フィリピン人講師は現地オフィスに出勤し、日本人に英会話のレッスンを行っています。09年に起業した当初は5人だったフィリピン人講師も今では約40人。ほとんどを正社員として雇用しており、一人ひとりがプロフェッショナルとして働く組織です。現在では多くの企業や大学にも導入され、東京の嘉悦大学では、英会話の必修授業として新入生全員が受講しています。私はフィリピン人講師の採用、顧客開拓などフィリピンと日本を往復しながら経営全般にかかわっています。

なぜフィリピンで英会話ビジネスを始めようと思ったのですか？

そもそものきっかけは、大学1年生のときにフィリピンで出会ったストリート・チルドレン。彼らはまだ幼いのに毎日路上に出て働いていました。当時、国際協力におけるスポーツの可能性について研究していたので、子どもたちと一緒にボール遊びなどをするようになりました。通い始めて3年目のある日、一人の子どものお母さんからこう言われたんです。「子どもたちは楽しそうだけど、あなたと一日遊んでいたせいで、路上で働くことができなかったの、だから今日食べるご飯を買うお金がないのよ。遊ぶんなら食べるものかお金をちょうだい」と。すごくショックでフィリピンに行くのはやめようかとすら思いました。でも悩んだ末、私はフィリピンの子どもたちと時間も夢も共有しているのだから、彼らと共に夢を実現したいと思ったんです。そこで、まずは、どうしたらこの問題を効率よく解決できるのか、フィリピンの貧困層の事情、特に現地のNGOや孤児院について調べました。すると、大変なことがわかりました。例えば、大規模なNGOが運営している孤児院でも、年間に保護できる幼い子どもの数はわずか数人。その理由は、孤児院自体に予算がないのと、孤児院にいる大学生が卒業して自立しないと幼い子どもが入れないというシステムになっていたのです。さらに、孤児院から大学生に支給される奨学金が高く、小学生へ支給される奨学金と比べると3倍の費用がかかるのですが、一方で、その大学生たちはとても意欲があり、優秀であることがわかりました。そこで大学生1人が在学中にトレーニングを受け、英会話講師として1日3時間働いて自ら奨学金を稼ぎ、孤児院はその浮いた費用で、新たに3人の子どもを受け入れられるというモデルを当社が提案。現在、5つの孤児院と提携、実践しています。

仕事のやりがいはどんなところにありますか？

英会話講師として雇用した学生がその給料で大学に通うことができて喜んでいることや、英会話レッスンを通じて日本の学生が自信を得て前向きになることなどたくさんあります。つまり誰かが自分の夢を実現できる力を持っていることに気づいて、新しい一歩を踏み出したときに大きなやりがいを感じます。

今後の夢・目標を教えてください

当社のビジョンは、フィリピンの貧困層の若者と共に、生まれた環境に関係なく、誰もが夢と自立を実現できる社会を目指すというもの。スカイプ英会話ビジネスは軌道に乗りましたが、それだけでは雇用できる人数にも限界があります。より多くの子どもの夢をかなえるため、今後は美容師やITなどのさまざまな職業の訓練を行うワクワークセンターを造っていきます。そこではストリート・チルドレンの親も働くことができ、真ん中にグラウンドを造ってみんなで遊ぶこともできます。来年から着工する予定で、今からとても楽しみなんです。

途上国で村落開発を行う

開発コンサルタント

現地の人たちと一緒に考え、話し合い、地域に根ざしたプロジェクトを実施する

(株)かいはつマネジメント・コンサルティング　国際協力部
梶房大樹氏

かじふさ・ひろき●1973年生まれ。広島大学附属福山高校、国際基督教大学教養学部卒。99年、英国サセックス大学大学院でジェンダーと開発学の修士取得。国際機関やNGO、青年海外協力隊を経て03年より現職。

開発コンサルティング企業とはどのような事業を行うのですか？

開発コンサルティング企業はJICA（国際協力機構）など公的機関からの委託により、ODA（政府開発援助）のプロジェクトを途上国で実施する企業です。橋や道路を造るなどハード系の会社もあれば、当社のようにソフト系の会社もあります。当社の場合は制度作り、人材育成の教育・研修など社会開発全般に取り組んでいます。業務を委託されると、案件によって数週間から数カ月、途上国に滞在します。1年以上、同じ案件に継続的に派遣される場合もあります。

梶房さんは途上国でどのような仕事に取り組んできたのですか？

主に中南米で村落開発に携わっています。この仕事に就く前、青年海外協力隊員としてグァテマラでの活動経験があり、公用語のスペイン語は習得していました。

パラグアイ・カアグアス市でワークショップ中。学校や教会を会場にすることが多いが、屋外を利用したり、酒場で開くことも

村落開発とは、貧困層が多い農村で、住民の生活を向上させるための支援で、農業開発とは視点が異なります。収益性の高い作物の栽培法など、農業技術を指導するのは農業開発分野の専門家ですが、私が担うのは収入を得られる農業活動を続けるために住民の意識や行動を変えていく、というアプローチです。

これまではパナマとパラグアイで、耕地面積が狭い小規模農家の支援プロジェクトに長く従事してきました。パナマは国土の大半が山岳地帯で農地の土壌が悪く、自分たちが食べる作物も十分に生産できずにいました。地域のリーダーを育成し、彼らを通じて生産性を高める技術を普及させる試みを実践しました。

一方、パラグアイの小規模農家は自給自足はできますが、市場経済に組み込まれていないため、収入につながることはありません。お金が必要になると、鶏や豚、牛など家畜を売ってその場をしのぐ、または余った農産物を売る。つまり、農業を営むという経営感覚はないのです。そうした人たちが農業で生計を向上できるよう低利の農業融資制度の活用を勧めたり、地域活性化のために農民グループを作る、ということをやってきました。

難しい仕事ですがどんなふうに行うのですか？

参加型開発という手法を使います。定期的にワークショップを開き、住民と一緒に活動計画を立て、問題点を話し合い、住民自身で物事を決めるのです。私は意見を引き出し、調整するファシリテーター（司会進行役）。思うように進まないときもあって悩みは尽きませんが、「いつも笑顔で冷静に」を心がけています。

日本では考えられないような場面もあります。例えば、地域によって中高年世代の人は学校に行っていないので、読み書きができない。ワークショップで文字を使用する際には、読み書きができる若い参加者に助けてもらっています。

この仕事でうれしかったできごとは？

ある農民グループのリーダー育成研修の最終時、私は参加者に問いました。他の農民グループと自主的に交流できるかを「はい」か「いいえ」で答えてくださいと。すると、10人全員がいっせいに笑顔で「シー、セニョール！（はい、旦那！）」。予想外のポジティブな反応に感動しました。年齢や立場の違いなどを越え、皆と一体感をもてたとき、喜びを感じます。

武装解除や紛争解決を行う

NGO事務局長

日本の新たな国際協力のかたちを考え出し、実践していきたい

日本紛争予防センター（JCCP）　事務局長
瀬谷ルミ子氏

せや・るみこ●1977年生まれ。群馬県立前橋女子高校、中央大学総合政策学部卒、ブラッドフォード大学紛争解決学修了。第2回秋野豊賞受賞。2011年ニューズウイーク日本版「世界が尊敬する日本人25人」に選出。

「武装解除」とは何ですか？

紛争が終わった後に兵士たちから武器を回収し、そこからは一般市民として生活していけるように職業訓練などを施し、社会復帰させる仕事です。対象になるのは国の正式な軍隊のときもあれば、民兵組織のときもあり、また兵士といっても子ども兵もいれば、年老いた兵士、武装勢力に誘拐された武器を持たない女性まで、さまざまです。これまでに私は、アフリカやアジアで武装解除を行いました。

国際協力の道に進んだきっかけは何ですか？

1枚の写真でした。高3の4月、家で新聞をめくっていて、ルワンダの難民キャンプの親子の写真が目に飛び込んできました。コレラで死にかけている母親を、泣きながら起こそうとする小さな子ども。衝撃でした。私は居間でお菓子を食べている。あいだにあるのはカメラのレンズひとつ。この世界の構図っていったい何だろう？知りたいと強く思いました。

もしかしたらこの人たちの人生は、権力者に翻弄される人生なのではないか？だとすると日本の私たちと社会の仕組みは似ているかもしれない…。当時、バブルのはじけた閉塞感のなか、多くの人と同様、私は日本の政治に不信感をもっていました。だから親近感のようなものも抱いたのですが、決定的な違いにも気づきました。彼らには選択肢がない。私にはあるのです。文句ばかり言ってないで、やればいい。努力すれば自分で状況を変えられる社会に私は生きているのだと気づきました。その高3の春の時点で、私はまだ進路が決まっておらず、焦ってもいました。

「紛争解決を仕事にしよう」

好きな英語を生かせて、人があまりやっていない仕事を…そんな私の希望に合った仕事がやっと見つかった瞬間でした。

大学はどのように選んだのですか？

日本で紛争解決が学べる大学を探したのですが、当時はありませんでした。そこで国際的なベースがありながら何でも学べそうな中央大学総合政策学部に進学。大学では図書館で英語の専門書を読み漁ったり、アフリカの紛争に関するセミナーに出席したりしました。空き時間はアルバイトをかけもちして、貯めたお金で海外に行き、英会話を磨きました。

大学時代は「ルワンダに行く」ことをひとつの目標にしていました。それがかなったのは大学3年の夏。現地でホームステイをさせてくれるルワンダ人家庭を紹介してもらったのです。ルワンダでは94年4月に多数派のフツ族による少数派のツチ族への虐殺が発生し、約100日間で80万人以上が犠牲となりました。私はその3年後に首都キガリの空港に降り立ちました。単身で向かう不安より、うれしさのほうがはるかに勝っていました。

しかし数日後、「自分は役に立たない」と、深く落胆しました。行けば何か現地の人のためにできることがあると思っていたのです。けれど虐殺当時の話を尋ねても、多くの人が口をつぐむ…。少し考えればわかることですが、部外者に心の内を吐露するはずもないし、そう簡単に心の傷が癒えるわけもないのです。「私には彼らの問題を解決するスキルが何もない」と痛感し、専門性を身につけることがそれからの自分の目標になりました。

専門性として「武装解除」を選んだのはなぜですか？

これといって取り柄のない私は、人と同じことをしていてはダメだと小さいころから思い続けていました。そんな私がこだわった条件は「ニーズがあるのになり手がない分野」。そうして見つけたのが武装解除でした。それを学びに今度は英国ブラッドフォード大学の修士課程に留学したのですが、結局そこでは学べず、実践しながら学ぼうと決意しました。

2000年に修士課程を終え、日本のNGOからルワンダの現地事務所の駐在員になってほしいという話をもらいました。担当したのは、虐殺で夫を失った女性たちに洋裁の職業訓練をするプロジェク

トや、小学校の支援。日本からの寄付で机と椅子を寄贈し、村人からこれ以上ないくらいに感謝されました。

その後、念願かなって、初めて武装解除を担当することになったのは西アフリカのシエラレオネという国。02年から国連PKO（平和維持活動）で働く国連ボランティアとして採用されました。私のチームは15人全員が国連ボランティアで、ネパール、フランス、ナイジェリアなど国籍はさまざま、年齢は24歳の私が最年少で一番上は50代。現場の問題にどう対処すべきか、身の安全をどう守るべきか、彼らの仕事ぶりから多くを学びました。次の仕事はアフガニスタン。03年から外務省の日本大使館員として、各地の軍閥（武装勢力）を解体する任務にあたりました。兵士1人につき武器1丁をもってくるのと引き換えに武装解除を認める。これが通常のやり方ですが、司令官の多くは理由をつけて避けようとします。その場合、それが本当かどうか事前に情報収集し、ぎりぎりまで条件を下げない交渉を続け、「これがあなたたちに与えられた最後の社会復帰のチャンス。これを逃したら罰せられることになる」と言えるように法律や処罰の方法も準備しました。アフガニスタンでは小型武器に加えて戦車や大砲などの大型武器も対象で、最終的には約1万2000の大型武器を回収しました。

その後06年から1年間、コートジボワールの国連PKOで国連職員として働き、07年にはガーナにある国連PKOの訓練施設に講師として呼ばれるようになりました。そのとき私は国連職員や兵士に訓練を行う立場になっており、国際コンサルタントとして独立した場合の国際謝礼基準は、年額20万ドルと試算されていました。独立すべきかどうか考えました。

そこでNGOに入ったのはなぜですか？

現場で働いていくなかで、武装解除だけでは解決できないことがたくさんあることに気づきました。それに真正面から取り組むには起業するか、NGOを立ち上げるかだと考えていた矢先に、日本紛争予防センター（JCCP）から空席だった事務局長への就任をもちかけられ、事業方針や戦略を私に一任してもらうことを条件にお受けすることにしました。07年4月、私が30歳のときです。

当時、海外事務所はカンボジアのみ、職員は1人だけでしたが、現在はソマリア、ケニア、南スーダンなどに現地事務所を置き、スタッフは40人以上に。まだ小さい組織ですが、解決策が見つかっていない紛争地の問題に取り組む、世界でも数少ない専門団体だと自負しています。

JCCPの活動内容を教えてください

紛争を経て壊れた社会を立て直すのが私たちの仕事です。危険すぎて外国人が近づけないような地域の問題を解決するべく、国連などから要請を受けるケースが多いです。例えばケニアでは、07年の大統領選後の暴動で大きな被害を受けたスラム地域で「平和構築事業」を行っています。暴動に発展しそうな火種を発見し解決できる人材を育成したり、暴動中の性的暴力などにより心に傷を負った女性や子どもの心のケアを行っています。ケアを行うカウンセラーを当初、スラムの若者のなかから40人選出して育成したところ頼もしく成長し、今では薬物使用者に対するケアも行ったり、他団体から仕事を請け負うほどになりました。そうして住民の人たちが自立し、私たちがいなくても地域の平和が保てるようになることが何よりうれしいですね。

危険地帯で働く際に女性として制約は？

女性だから気をつけなければいけないことはありますが、女性でよかったと思うことのほうが多いです。紛争地に行っても女性だと警戒されませんし、被害者には女性や子どもが多いのですが、そういう人たちも心を開いて話してくれます。私だけでなく、国連も政府機関も紛争地で働く女性は多く、みなさん冷静に仕事をされていると思います。

高校生にメッセージをお願いします

もし日本のマーケットは年々縮小していて、将来の選択肢が狭まっていると感じている人がいるとしたら、それは違うと言いたいですね。英語を身につけさえすれば、世界のいたるところに活躍の場があることを知ってください。

「日本が言うから信頼して武器を差し出すんだ。他の国だったら撃ち殺してやる…」武装解除の現場でそう言われました。それだけ日本の中立性というイメージは大きく、また紛争で甚大なダメージを受けている国々にとって、戦後に奇跡的復興を遂げた日本は大きな希望なのです。アフリカなどには何の偏見もなく日本人を受け入れる土壌があるし、また日本人は教育水準も高く、道徳観も兼ね備えている。世界で活躍できるポテンシャルはとても高いと思います。

コートジボワール西部の町で、武装解除の交渉と説明をした民兵組織と（2006年）

ソマリア国内の治安改善プロジェクトの一環で、現地のNGOに対して訓練を行う（2009年）